知的障害児教育における通知表を活用した「個への対応」に関する検討（４）

―知的障害養護学校での通知表改善とそれに基づく教育活動（生活単元学習）の分析―

“Individualized Instruction”using Report Card in Special Needs Education for Children with Intellectual Disabiliteies（４）

坂　本　　裕*

SAKAMOTO Yutaka

Ⅰ　問題と目的

第二報（坂本，2003）において，知的障害養護学校における「個への対応」に活用できる通知表の新しい形式・内容とその使用方法について検討を行った。そして，教師の負担を過度に増やすことはなく，保護者との連携を図りながら，学習形態の枠にとらわれない目標の設定・評価が可能であることを記述した。しかし，そうした通知表の新しい使用が「個への対応」を具体化する有効な手段であるためには，通知表に記述する目標設定と評価が日々の授業評価と連動するものでなくてはならない。

本報では，熊本県立菊池養護学校小学部（1998）の研究で掲載している知的障害養護学校小学部における生活単元学習での１単元全体の取り組みを対象とし，検討事例児１名への目標設定，評価の推移を中心に「個への対応」の分析を行う。そして，新しい通知表に記述された目標が授業の目標や手だてにどのように連動しているのか，また，授業評価が通知表の評価にどのように連動しているのかの検討結果を基にして，新しい通知表の授業レベルでの「個への対応」への有効性を明らかにしたい。

Ⅱ　検討授業と検討児の概要

１　検討授業

生活単元学習「ルンルンワールド」。学校祭のメイン会場（運動場）の一角に，Fig. 1に示したように，中央にタワーがあり，滑り台等の大型遊具をカートできる遊園地が設置された。そして，友だちや教師，近隣の保育園，小学校の子どもたちと毎日，思いっきり楽しく遊び，学校祭当日は多くの来場者といっしょに遊ぶ活動が展開された。

２　検討事例児

F 児（男）。E 養護学校小学部５年生に在籍する脳性まひに起因する重度知的障害児。

３　検討資料

x＋２年度通知表, x＋２年度研究授業「生活単元学習」学習指導案，関連資料（熊本県立菊池養護学校小学部，1998）

４　方法

x＋２年度通知表に記載された個別指導目標と, 生活単元学習における週ごとの指導目標や手だてが関連性をもって設定されているかが検討された。

Ⅲ　結果

Table１は F 児の x＋２年度２学期通知表における「子どもの様子と子どもへの願い」,「具体的願い」, 学期末の「子どもの育ち」「具体的願いの達成状況」，並びに，x＋２年度研究授業「生活単元学習」学習指導案等の中から目標（願い), 手だてに関するものを抜粋したものである。

x＋２年度２学期の学校生活を迎えるにあたり, 学級担任３名で原案を作成し，小学部７名の教師で F 児のとらえと育ちの願いが検討された。そして，保護者との懇談を経た「子どもの様子と子どもへの願い」並びに「具体的願い」の中で, 本対象単元に関する記述は Table１に示したように,「自分から積極的にチャレンジする姿」が中心的な願いであった。

そして, 単元を始めるに当たり, F 児の状況の把握と願い, 手だての検討がなされ, Table１のように,「遊び慣れると, 自分から繰り返し遊ぶ姿」を大切にし,「教師が遊具に誘い，そのおもしろさを体感できるようにする」ことが確認されている。

まず, 第１週目は,「すべての遊具を教師といっしょに

＊　岐阜大学教育学部障害児教育講座

Table１　検討事例児のｘ＋２年度第２学期通知表（抜粋）と生活単元学習「ルンルンワールド」における取り組みについて

通知表（2学期当初）	生活単元学習「ルンルンワールド」における願い・手だて・活動の様子の推移					通知表（2学期末）
	単元開始前	第1週目	第2週目	第3週目	第4週目	
＜様子と願い＞ 今学期も水遊び、E養まつりに向けた滑り台などの大型遊具での遊び、秋空の下での屋外の遊びなどで、自分から積極的にチャレンジする姿を沢山見せてほしいと思います。また、交流校の友だちにも自分からかかわりを持ち、いっしょに一緒に楽しく遊んでほしいと期待します。 ＜具体的願い＞ E養まつりや校外の遊びでは好きな遊びを用意し、自分から取り組むことができるようにするなか、新しい遊びにもチャレンジしてほしい。	＜様子＞ 体に軽いまひがあるためか、高低差のあるものやスピード感のあるものが苦手である。しかし、いったん、滑り台などで遊び慣れると、自分から繰り返し遊ぶ姿が見られる。 ＜願い＞ 多くの遊具に自分から積極的にチャレンジする姿を沢山見せてほしい。さらに、交流校の友だちにも自分からかかわり、楽しく遊んでほしい。 ＜手だて＞ 教師が遊具に誘い、そのおもしろさを体感できるようにする。	＜願い＞ いろいろな遊具の中から、お気に入りの遊具を見つけて楽しく遊んでほしい。 ＜手だて＞ すべての遊具を教師といっしょに体験する。 ＜様子＞ ルンルン滑り台がお気に入りとなった。週末には、自分から繰り返し、友達だちと笑顔で遊ぶ姿が見られた。	＜願い＞ お気に入りのルンルン滑り台で思う存分遊んでほしい。 ＜手だて＞ F児君専用の段ボール製のマットを用意し、ルンルン滑ることができるようにする。 ＜様子＞ マットを使って自分から繰り返し滑る中、教師を誘うようになった。さらに、腹ばいで、両手を広げ、頭から滑るようになった。週末の交流活動では、いつもはその遊びの輪から離れがちのF児君も、遊び込んできたルンルン滑り台で交流校の友だちと繰り返し滑る姿が見られた。	＜願い＞ いろいろな遊具で思いっきり遊んでほしい。 ＜手だて＞ ルンルン滑り台でしばらく遊んだ後、他の遊具に誘う。 ＜様子＞ 自分から遊びたい遊具の名称を言いながら、別の遊具で遊び始めた。キッくん滑り台では、友だちと距離を競い、繰り返して遊んだ。ルンルン滑り台では、自分から友だちや保育園児を背中に乗せて滑る姿が見られた。	＜願い＞ いろいろな遊具で、交流校の友だちと思いっきり遊んでほしい。 ＜手だて＞ F児君が自分で好きな遊びを選ぶようにする。 ＜様子＞ しばらく友だちや教師といっしょにルンルン滑り台で楽しんだ後、自分から本校や交流校などの友だちとドンドンブランコやルンルンカートに乗って遊び始めた。さらに、キッくん滑り台で滑走距離を競うなど、ルンルンワールド全体で、思いっきり遊ぶ姿を見せてくれた。祭当日も、ルンルン滑り台を中心に、両親を誘い、自分からいろいろな遊具で遊ぶことができた。	＜育ち＞ 今学期も、E養まつりに向けた遊びやB山での遊びでは、いろいろなことに自分からチャレンジし、そのおもしろさを体感し、自分の遊びのレパートリーに取り込んでいく姿にはとても好感が持てました。最初は恐る恐るといった姿も見られました。しかし、段々とそのおもしろさが分かってくると、本校の友だち、さらには、交流校の友だちに自分からかかわりを持ち、共に遊ぶ姿を、今学期も見せてくれ、とてもうれしく思っています。(後略) ＜達成状況＞ 今年のE養まつりでは滑り台を中心に、汗びっしょりになって遊びました。ロープーウェイなどの遊具に自分から乗り込んだり、滑り台で自分からいろいろな滑り方を工夫したりと、例年以上に積極的に遊ぶ姿が印象に残りました。また、これまでは本校や交流校の友だちと一緒いっしょに遊ぶことがやや苦手でしたが、今年は遊び込んだ滑り台などで自分から遊びの輪に入って遊ぶことができました。(後略)

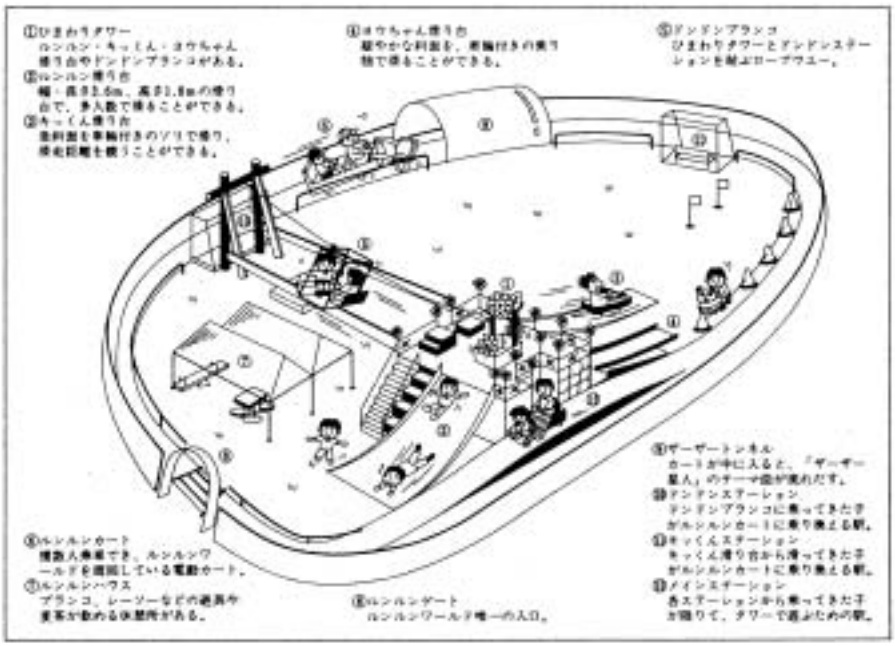

Fig.1　「ルンルンワールド」の見取り図

体験」し，「お気に入りの遊具をみつける」ようにした。１日目，２日目は大型滑り台に何度も挑戦し，泥だらけになって遊んだ。３日目は登校直後から空中ブランコに乗ると張り切っていたが，いざその場になると尻込みをしてしまった。ただし，大型滑り台で汗びっしょりになり，カートに友だちと乗って遊んだ。

第１週目の様子を受け，第２週目は，「F 児専用の段ボール製のマットを用意」し,「お気に入りのルンルン滑り台で思う存分遊ぶ」ようにした。実際に遊んでみると，マットを使って自分から繰り返し滑る中，教師を誘い，腹ばいで，両手を広げ，頭から滑るようになった。また，第１週目は苦手だったソリに乗る滑り台等にも自分から挑戦する姿がみられた。さらに，週末の I 小学校との交流活動では，いつもはその遊びの輪から離れがちの F 児も，遊び込んできた大型滑り台で交流校の友だちと繰り返し滑る姿がみられた。

第３週目は，教師が「ルンルン滑り台でしばらく遊んだ後，他の遊具に誘う」ことで,「いろいろな遊具で思いっきり遊ぶ」ようにした。第３週目に入った直後から，これまであまり遊んだことのない遊具で自分から遊び始めた。そして，友だちと距離を競い，繰り返し遊ぶような姿もみられた。

最終週は「自分で好きな遊びを選ぶ」ようにし,「いろいろな遊具で，交流校の友だちと思いっきり遊ぶ」姿を願った。毎日，交流校の参加もあったが，自分から小学生や保育園児と空中ブランコやカートに乗って遊び始めた。学校祭当日も，大型滑り台を中心に，両親を誘い，自分からいろいろな遊具で遊ぶことができた。

そして，x＋２年度２学期を終えるにあたり，小学部７名の教師と保護者で F 児の育ちとして，「自分からチャレンジし，そのおもしろさを体感し，自分の遊びのレパートリーに取り込んでいく姿」,「本校の友だち，さらには，交流校の友だちに自分からかかわりをもち，共に遊ぶ姿」が確認されている。

Ⅳ　考察

４週間の取り組みの中で遊びの様子が大きく変化した F 児の育ちにおいて，学期当初に行われた通知表に記述された「子どもの様子と子どもへの願い」,「具体的願い」を複数の教師で，更に保護者と検討したことが有効であったと思われた。検討の過程で，これまでの F 児の遊びの状況や興味関心が具体的な姿として検討され，遊具の設定，並びに，教師の具体的な働きかけへと反映された。そして，事前の F 児のとらえにそって授業が展開され，F 児の遊びの姿に合わせて，その支援が細かに変更されていった。

このように遊び活動であっても,「個への対応」として，子どもに願う姿の事前の十分な検討と，それを達成するための支援の細かな検討は必須であると考える。

文献

熊本県立菊池養護学校小学部（1998）「遊ぶ楽しさ　わかちあう」生活づくりをより確かに．発達の遅れと教育，485，35-40.

坂本　裕（2003）知的障害児教育における通知表を活用した「個への対応」に関する検討⑵―知的障害養護学校での通知表改善の試み―. 岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究），５，183-190.